

男性同性愛マンガの変化と現在 (第 2 報)

— 「やおい」・「BL」と「リアル系男性同性愛マンガ」 —

橋本みさき*

大岩 敦子**

山田 綾

天野 稔子***

1. はじめに

第 1 報では、研究の目的と方法、そして少女マンガ誌に「男性同性愛」が描かれ、どのように読まれてきたかについて、「花の 24 年組」による「少年愛」マンガと『JUNE』に掲載されたマンガを中心に作者の意図や当時の社会状況と少女マンガ業界の状況、インタビュー調査による読者の読みを検討した。「少年愛」は、男性中心社会の抑圧とそれに起因する女性性からの逃避・分離の装置であり、現行のジェンダー秩序への対抗的表現であると同時に、その性描写は、少女たちが立ち入ってはいけないと思込んでいた性の世界へのハードルを軽々と越えさせる「装置」でもあった。その「装置」は、読者である少女たちに要求されたり、あるいは拒否されたりしながら、拡大していった。拡大は、「やおい」や「BL」を好んで読む女子が「腐女子」と名付けられるように、棲み分けされながら進んできた。また、時代的な制約もあり、「少年愛」という枠組みは受け入れられても、赤裸々すぎる性表現を拒否するなど、その受容の仕方においても、分かれたといえる。第 2 報では、「やおい」、「JUNE」、「BL」、そして「リアル系男性同性愛マンガ」について、作者の意図、社会背景、マンガ業界の状況、そして読者インタビューにより検討する。

2. 「やおい」・「BL」の表現

「やおい」と「BL」は、読者にとって身近な存在になる一方で、「少年愛」や「JUNE」とは異なる新たな表現を獲得していった。大きな変化は、性表現が盛んになった点である。男性同士のSEXがリアルに描かれるようになり、その描写に特化したマンガも登場し、人気を博すようになる。「花の 24 年組」では、文学的・芸術的に質が高いものが目指されたが、「やおい」は「やおい」の名前の由来となる「やまなし、オチなし、いみなし」のようにストーリーを重視せず、主に性行為など、キャラクター同士が愛し合う描写に重点が置かれる。また、商業用のオリジナル作品の他に、既存のマンガ、ゲーム、アニメなどの男キャラクター同士を独自に恋愛関係にさせ（カップリングという）、二次創作された作品が同人誌として売り出されている作品もある。

* 愛知教育大学大学院学生

** 名古屋市立野並小学校非常勤講師

*** 尾張旭市立旭小学校

榎原史保美は、「JUNE 小説」から「やおい小説」への変化について次のように語っており、それはマンガにも該当すると考えられる¹⁾。重く耽美的な作品を扱った「JUNE」に対して、「やおい」は、素人の女性により描かれたパロディであり、商業誌のような規制がなく、オリジナル作品を作る手間が省け、もともとの原作の人気も見込める気楽さや気軽さによって、大量の作品が送り出されることになった。キャラクターも設定も借りものなので、作者の腕の見せ所は唯一の創作であるセックスシーンになる。規制がないため、過激なセックスシーンを描くことが一般的になり、ホモセクシャルのポルノという要素が強くなったが、それはオリジナルな作品においてもみられ、作者自身の欲求であったと考えられる。それが読者にも喜んで受け入れられ、大きな流れとなる。では、なぜ男性同士の性描写が好まれるのだろうか。

この点について、永久保陽子は、次のように述べている。「〈やおい小説〉が目指しているもの、それはジェンダーの娯楽化なのである。楽しみたい、しかし抑圧を排除したいというジェンダーに対する二律背反の欲求を、限りなく満たしてくれるテキスト。恋愛小説というテキストにおいて、ジェンダー的抑圧を娯楽に変換してしまう。抑圧に翻弄される存在から、それをコントロールして楽しむ主体への転換」²⁾であるという。また、藤本由香里は、現在では、ジェンダー秩序の中で被るストレスは、人により様々であり、同じ女性であっても階層や職業的地位、容姿、世代などの属性により受けるストレスの質は異なる。「やおい」・「BL」というのは、ジェンダー的抑圧という拘束具を外してくれ、多様な設定によって「混在する二種の性差的要素の匙加減」とその組み合わせ、を楽しみ、個々の異なるストレスから生じる凝りをほぐしてくれるオーダーメイドのつぼ押し器のようなものと述べている³⁾。

ところで、堀あきこのように、男性同性愛では、対等な関係であるはずの男同士の関係に組み込まれている「攻め」と「受け」の、「受け」の存在の描き方が重要であるという意見もある⁴⁾。「『受け』という存在は性別を意識させるような存在であるが、女に割り当てられた役割を身に纏いつつ、それを男の魅力として認めさせる〈男〉を読者は楽しんでいるのではないだろうか。男でありながら愛でられ惜しげもなく称賛される姿を女は無関係に見ることが出来る。男が女のような喘ぎ声をあげ頬を紅潮させる時、女は無関係にエロスの快楽に溺れることができるのだ。」

一方、よしながふみは、「BL」では、「JUNE 系の背徳的なものに対するあこがれとは違う、男の人同士の対等な関係性」や「男の子同士の友情から一步踏み越えちゃった関係」を描きたかったと言い、その元にあるのは、こだか和麻の描く「相棒」のような関係性であると話している⁵⁾。つまり、性描写そのものに重きを置いていない。また、同じ男性同性愛マンガであっても、人が死ぬことでしか物語が解決されない同性愛ものは描けないので、「JUNE」では描きたいと思っただけがないという。なぜなら、「死ぬことで『君は僕の永遠』になって、彼らが立ち向かっていった社会的な問題もうやむやになってしまう」からである。そうではなく、「本当に恋人同士としてくっついたあとに、親や社会とどうやってつきあっていくのかが知りたかった。」という。また、「JUNE」では、「そういう人たち（同性愛者）がまるで幸せになっちゃいけないかのような悲劇

的な結末の物語が多くて、ハッピーエンドものが描きたいから「BL」に居場所を見つけた。」(() 内は筆者) と述べている⁶⁾。

作者たちは、「少年愛」や「JUNE」の設定に不自由さを感じ、そこから抜け出し、「やおい」同人誌を経て、過激な性行為描写に結び付いていったが、よしながのように、同性愛をモチーフにして、人間の対等な関係性や、社会的な問題に光を当てることを目指す方向をもつくりだしていった。

よしながのこのような志向は、読者の見方と関わっている。よしながは、「BL」の魅力に関する読者の指摘について、以下のように語っている⁷⁾。

自分は「BL」を「女の子でも普通に読めるポルノ」として認識していたが、自分よりも下の世代の読者に「BL」にしかない面白さを尋ねると、「お仕事」だと答えたという。仕事の世界をいろいろ見たいのに、仕事の世界は女の子向けの少女マンガには描かれていない。それゆえ、様々な仕事の世界が描かれている「BL」に惹かれるのだそうだ。『パタリロ!』(魔夜峰央, 白泉社, 1978-, 既刊 95 巻)や『エロイカより愛をこめて』(青池保子, 秋田書店, 1976, 既刊 39 巻)であれば、MI6 や NATO といった情報機関が出てきて女性が入ることのできない世界のことを知ることができる。よって、「BL の源流を遡っていくと、たどりつくのは青池保子さんだと思っているんですよ。わりと女の子をきれい〜いに排除したものを描いているでしょう。」と話している。また、「JUNE」ものは恋愛が主で2人だけの世界が描かれているとも語っている。「昔の魅力あるマンガには恋愛だけでないものがたくさんあった」とも話しており、現在はそうではなく、「BL」の世界で男性同士を描くことで、女性は体験できない世界を垣間見ることができ、そこに読者が魅力を感じているととらえていることを明らかにしている。

3. 「やおい」・「BL」はどう読まれているのか

では、実際に読者はどのように読んでいるのだろうか。4人へのインタビュー内容は、主に以下の3点である。

- ① 男性同士の同性愛を描いたマンガを読むきっかけ・印象・魅力
- ② なぜ「BL」が好きなことを隠すのか
- ③ 現実のゲイに対する認識、並びに「BL」マンガとの差異について

3.1. 男性同士の同性愛を描いたマンガを読むきっかけと印象

男性同士の恋愛が描かれていることに対しての印象は、A'さんは「覚えていない」であり、C'さんとD'さんはそれぞれ「何とも思わなかった」と「違和感がなかった」であることから、男性同士の恋愛を描いたマンガは、衝撃的・印象的なものではなくなっていると考えられる。B'さんのように友人に勧められて、初めて読んだ作品が性描写メインだった場合に、「うわーって。もう、ひいた。正直ひいた。」と、リアルな性描写に対する嫌悪感を感じている人もいる。

4人が「BL」作品に惹かれる点で共通していたのは、登場人物の関係性に重きが置かれている

点である。4人とも、性描写には惹かれてというのではなく、ストーリー性があり、関係性が描かれているものであれば、SEXシーンはおまけで良いと答えている。それは、裏返すと、性描写に違和感がないということでもある。しかし、「リアル系男性同性愛マンガ」については、「全く萌えないね。うん、やっぱり別だからね。現実世界だから。」と語っており、「やおい」や「BL」作品は、「萌え」(サブカルチャーにおいて、登場キャラクターなどへのある種の強い好意などの感情を表す言葉)の対象であることも事実のようである。

C'さんは「第三者の視点で見れる」ことに加えて、「ボーイズラブの視点だと…人間同士の愛の話に、見えたんだよね。」と語っており、同じく関係性の描き方に魅力を感じている。なかでも、少女マンガのように幸せになることが確約された男女の恋愛や関係から離れ、男女を超えた人間同士の愛を描いている点に魅力を感じている。B'さんは、「相手を殺したいほど憎みみたいな。男女の恋愛だと激しいぶつかり合いっていか憎しみが無い。」と、男女の恋愛では考えられない関係性に魅力を感じている。

<受け>についても、D'さんは男性同士の描写について、「可愛い子が<受け>なのがあんまり好きじゃなくって。男女でいいじゃんってなっちゃう。」、「多分カッコいい人とか男っぽい人のかわいい姿が見れたほうがいいのか。」と語っている。

また、SFを好んで読むB'さんは、「趣味の時まで、現実世界はあまり意識したくない。」と語り、自分が「学生だったら学校とか、そういう人間関係とか。勉強。」という「現実」を忘れるための装置であると語っている。

A'さんは、「自分が好きな作品のスピノフが読みたい。もっとその話について読みたいから読み始めた。」と、元の作品の魅力に惹かれて読んでいると語っている。A'さんの語りに顕著なように、男性同士の恋愛を特別な装置やジェンダー秩序に対抗する表現とみなしたり、また性描写をタブー視したりする目線がもはやない、ということではないだろうか。

3.2. なぜBLが好きなのを隠すのか

しかし、4人のインタビューの発言をみると、性描写や同性愛、あるいはそれを読むことが世間で認められているとも捉えていない。

それゆえ、「BL」が好きであることを語る相手は限られている。例えば、C'の場合、高校・大学時代の友人には隠し、「BL」や「やおい」を好む中学時代の友人とは一晩中語り明かすというように、話す相手を限定している。

理由は、「好きじゃない人に言うと、不快だったりするでしょう。男同士キモッ!みたいな。なんか腐女子に対して何とも思わない人もいれば、ちょっと嫌だって思う人もいるから。あんまり言わないようにはしてたかな。」と、ホモフォビアを意識し、敢えて自分から話すことはないという。C'さんは、「エロ本と変わらないからね。正直。」とポルノ要素が含まれていることが、周りに言いにくい理由だと言及している。また、高校進学や大学進学等により新しい集団に加わる際には、敢えて話さないと語っており、ごく狭い、共感し合える者たちだけによりつくられる

「私たちの世界」が心地よいということであろう。

3.3. 「BL」の魅力について

ゲイについては、A'さんの「いや別にいいんじゃないすか。恋愛は自由だし。」や、C'の「いいんじゃないかなって思う。」という発言からわかるように、同性愛を容認しているものの、どこかそっけなさを感じる。B'さんも、「べつに抵抗はないけど。」というものであった。

マンガと現実の違いについて、A'さんは「基本的には、あなたと一緒にいられるだけで楽しいわとか、何だろう、友情をちょっと超えちゃった程度の話だから、あんまり汚くないよね。」と語り、D'さんも「女子の幻想が入ってるなって。なるよね。そんな綺麗なもんじゃないし。」とあくまでファンタジーであり、現実と違うからこそ「綺麗に」描かれているとみていた。そしてB'さんは、「男女間の恋愛でも付き合うまでが楽しいっていうか、そこまでは綺麗じゃない。とりあえず全然リアルとは違うと思うよ。あれは乙女たちの夢だもんね。夢の形だよね。」と語っており、現実と違うからこそ「綺麗に」「乙女たちの夢」として描かれるのは、同性愛だけでなく、異性愛でも同じということである。

また、C'さんは「現実世界はハードル高いじゃん。男性同士で付き合うっていうのって、まわりの目もあるし、簡単にカミングアウトできない。アメリカとか、聖書では同性愛は罪だから、リンチされたり、なかなか幸せになれないとかいうのはあると思うから、まあ、同人誌とかだと現実の事は忘れて、カミングアウトしたり、当然な感じでまかり通っちゃうし、ファンタジーだよなって思う。そこは。」と、同性愛の現実の困難にも言及している。

ここで明らかになるのは、4人が共通して「BL」はフィクションであり、現実と異なるからこそ惹かれるということである。このことについて、東園子は「私のための物語」という言葉で説明している⁸⁾。「やおい」は、自分自身が萌えるための「私のための物語」なのである。また、4人のインタビューは、ゲイの現実についてはあまり知らないようであった。そのような読者が「やおい同人誌」の書き手に回ることを考えるなら、ゲイの現実と異なる表現になることも当然起こりうる。ではなぜ、男性同士の関係を好むのか。東は、その理由として、「女の子は男の子に憧れてるからだと思う。」⁹⁾と説明する。つまり、女である自分たちと同じように抑圧されている立場にあるから、ゲイを取り上げているわけではなく、好まれるのは、むしろゲイらしくない、「普通のサラリーマン」ということになる。

この点と関わって、今回のインタビュー調査では、インタビューは言葉に詰まる場面が多かった。特に、「BL」の魅力については、全員が言葉を詰まらせ、なぜ男性同士を自分が好んでいいのかについては考えたこともないといった様子であった。「BL」は、自分の生活現実との関わりを考えなくてよく、なぜ自分が惹かれるのかさえ、考えないで済むから楽なのではないか。なんとなくいいと思ったり、無意識的に救われた気になったりする、存在なのである。A'さんのように、好きなマンガの描き換えだから読む、ということも生じる。

今回の読者インタビューでは、性行為の描写により欲求を満たすという認識は薄いように語ら

れていた。この点については、語りにくさなどもあり、さらなる検討が必要であると考えている。読者によっては、男性同性愛が現実のジェンダー秩序から逃れ、自由に恋愛関係を想像できる装置として機能している側面もみられたが、そのニュアンスは再ジェンダー化につながる要素を含みもっているとも考えられた。そして、特別な意味づけを与えられていた男性同性愛が性的読み物として読者に受容されつつある面も見受けられ、女性独自のポルノグラフィが獲得されつつある過程の一端を示しているにとらえることもできる¹⁰⁾。

4. 「リアル系同性愛マンガ」の誕生

男性同士の恋愛を描く点では、「少年愛」や「やおい」「BL」と類似しているが、それらとは異なる新しいジャンルのマンガが90年代に誕生した。それらを本研究では、「リアル系同性愛マンガ」と名付けたが、「リアル系同性愛マンガ」が誕生した背景には、次のことがあると考えられる。

1つは、セクシュアル・マイノリティに対する関心や理解の高まりである。近代に入り、異性愛を前提とする性科学などにより、同性愛は「異常」とされてきた。しかし、国際的にも見直され、日本でも90年代前半に、雑誌『CREA (クレア)』(文藝春秋)の特集「ゲイ・ルネッサンス91」が発端となり、日本全体に「ゲイブーム」が起きたとされている¹¹⁾。

2つめは、「ヤオイ論争」である。1992年にフェミ系ミニコミ誌(自主製作の雑誌)「CHOISTR (ショワジール)」において、ゲイの佐藤雅樹の投稿「ヤオイなんて死んでしまえばいい」という連載が発端となり、「やおい論争」が起こる。(ここでいう「ヤオイ」とは、男性同士の恋愛を描いたマンガ全体を指す。)

佐藤は、「ヤオイ」は、登場する男性がすべて美しく、同性愛は禁断の愛であり、ゲイに対する勝手な価値観を押しつけるものであり、現実のゲイとはかけ離れた「性的ファンタジー」を捏造するものでしかなく、ゲイを差別し、抑圧していると批判した。これに対して「やおい」同人誌側の言い分は、ゲイが「やおい」を読むことによってむしろ「自分たちの世界に土足で踏み入れられた」、加えて「ゲイとやおいは別物であり、実際のゲイとは関係がない」と棲み分けを前提とするものであった¹²⁾。

このような議論のなかで、真面目なゲイの問題や現実を描きたいという女性少女漫画家の羅川真里茂は、一般少女マンガ誌である『花とゆめ』(白泉社)に幻想ではないゲイの実情を描いた『ニューヨーク・ニューヨーク』(白泉社、1995-1998、全3巻)を描く。この作品以降、リアルなゲイの物語を描いた作品が生み出されていくことになった。

5. 「リアル系男性同性愛マンガ」に描かれたこと

では、「リアル系男性同性愛マンガ」には、何が描かれているのだろうか。

1つは、同性愛者が直面している現実や問題である。前述の『ニューヨーク・ニューヨーク』が該当する。ゲイである主人公と周りの人間との関係を通して、ゲイへの偏見、ゲイを隠すことの辛さ、家族へのカミングアウトの困難、エイズの問題などが取り上げられている。作品を連載

した当時、性で遊ぶBL（当時使われた言葉は「ヤオイ」）を快く思わない同性愛者もいた。藤本由香里はこの作品について、「本当の意味で『現実のゲイ』をテーマにして描かれた作品は、これがほとんど初めてとあっていい」と評し、次のように述べている。「『ニューヨーク・ニューヨーク』ほど、同性愛者差別の現状、当事者の中にもあるホモフォビア（同性愛嫌悪）、カミングアウトの困難、偽装結婚や同性愛者の性生活、エイズの問題に至るまで、多角的に肉付けされた作品は他にないと言っていいだろう。」¹³⁾

羅川は、この作品について、ストーリーが進むにつれて、同性愛者に受け入れられていき、またファンレターの内容もキャラクターがカッコイイという表面的なものから、作者が作中に盛り込んだテキストに関するものに変化していったという¹⁴⁾。この作品は、同性愛者の抱える葛藤や問題にマンガという形で切り込み、同性愛に関わる社会的な課題を社会に投げかけるものへと成長していったといえよう。

2つめは、普通の人間の日常の一つとして同性愛者の日常を描いている。その例としては、よしながふみの『きのう何食べた?』（講談社、2007-、既刊11巻）が挙げられる。『ニューヨーク・ニューヨーク』が、少女漫画誌でゲイを取り巻くあらゆる問題を取り上げ、全体的にシリアスであるのに対して、この作品は料理マンガとして青年向け漫画誌で連載しており、ゲイカップルの穏やかな日常が、主人公や、そのパートナーが作る料理と共に描かれている。男女問わず多くの世代に読まれている。

先に述べたように、「『BL』が描いたのは、家父長制&異性愛規範社会による女性への抑圧から無縁な状態で、のびのびとラブやセックスやライフを謳歌するキャラクターたち」¹⁵⁾であったのに対し、よしながのキャラクターは、それとは異なる。よしながは、「女性」であるということに対する抑圧や、異性愛主義への疑問を感じており、それらが作品の中に顕著に表れている。インタビューの中で、「性差への固定観念を超えた関係がお好きなんですね。」という問いに対し、「本当の人間の愛は、生殖から離れたところにあるんだと言いたいんだと思います。夫婦になったほうが都合がいいとか、そういう生きるための方便じゃないところに本当の愛があるということなのかと思います。」¹⁶⁾とよしながは答えている。

よしながは、「BL」誌は作家への縛りがゆるく、自分が溜め込んできた「24年組」的な物語づくりを入れても何も言われず、特に「ハッピーエンドを描いてもいい」というところに魅力を感じていた。つまりは、「JUNE」の「同性愛は若くて美しい関係のまま死なないと美しくない」や「反対されて、日陰で咲く花だからこそ美しい」といった世界観でなくても、同性愛というテーマさえ守ればなんでも描いていいという自由を享受していた¹⁷⁾。また、他の「BL」作品と比較し、「BLとしてお互いが好きになっていく過程を描かなきゃいけないのに、どうしてもくっついてからの二人のことを描きたいと思ってしまう。マイノリティであることの居心地の悪さとか、家族や友だちにゲイであることをどう伝えるのかとか、そういうことに気持ちが行ってしまっただけでもそんな地味な話を、新人がBL誌で描けるはずもないですよ。『BL』はうまくは描けないけ

れど大好きだし続けたいと思っていたので、並行して違うものを描ける道を探そうと思いました。」¹⁸⁾と話している。

「リアル系男性同性愛マンガ」には、ゲイ当事者が描いた作品もある。例えば、田亀源五郎『弟の夫』（双葉社、2014-、既刊2巻）では、主人公と、亡くなった弟の夫であるカナダ人と、主人公の娘との日常生活が描かれている。主人公は「ノンケ（異性愛者）」なので、ゲイであるカナダ人をよく理解していないため警戒している節が見られる。このように、ゲイとノンケ、女兒のコミュニケーションを通して、同性愛者の存在を、青年誌に連載している。

キャラクターを見ると、当事者ではない作者、例えば羅川とよしながの描くキャラクターは線が細く、所謂「イケメン」であり、当事者である田亀の描くキャラクターはがたいが良く、仕草からゲイは色気が感じられるなど、異性愛の女子向けではなく、ゲイに向けて描かれており、当事者の読者を魅了するだけでなく、ゲイが存在していることを実感できるものだといえよう。

田亀も、同性愛者を知ってもらい、異性愛者の同性愛者に対する誤解がとけるきっかけになってほしいという気持ちで描いており、この作品には読者が違和感を覚えるようなシーンを描いてもいる。例えば、男性のシャワーシーンである。『月刊アクション』（双葉社）という青年向け漫画誌男性ではシャワーシーンは女性が当たり前である。そこに「男性」を登場させ、ゲイ向けの表現にし、敢えて読者に違和を感じさせるようにしている。その違和感自体が極めて「男性社会的なことだ」¹⁹⁾と田亀は語っている。つまり、田亀の読者へのまなざしは、多層的である。ゲイ当事者を意識しつつ、他方で異性愛主義を当たり前を受け入れている人々をも想定している。それが、ゲイ雑誌ではなく、一般誌に描くということであり、読者の多層的な想定は逆向きではあるが、羅川やよしながと同じである。

6. 「リアル系同性愛マンガ」はどう読まれているのか

ここまで、「リアル系同性愛マンガ」の特徴を述べたが、これらの特徴は読者にどのように受けとめられているのか。当事者ではない読者（女性）、当事者の読者（男性）にインタビュー調査を行った。

「BL」・「やおい」読者である C'、D' さんは、よしながの作品を好んで読んでおり、『きのう何食べた？』も好きな作品の一つである。よしながの作品の魅力について C' は、「人間同士の愛が描かれている」ところだとする。そして、ゲイの人間関係の日常について、例えば両親が抱くゲイに対する偏見による葛藤がうまく描けていたと、主人公が帰省した際に両親から言われたセリフを用いて以下のように述べた。「お母さんかお父さんからお前はそんな生半可な気持ちでゲイやっとなのか、みたいなことを言う。そんでシロさんがさあ、異性愛者がそんなみんな一生懸命生きてんのかよと言ってたから、ゲイの葛藤みたいなうまく表しているなって。わかりやすいなって思った。確かにそんなこと言われる筋合いないわけ。いくら親だつてさ。そういう意味ではゲイの葛藤がうまく描かれているなって。」

C'さんは、よしながが描く関係から、「当たり前」を問い直すまなざしを得、そこに魅力に感じており、それを通して同性愛者の置かれている状況についても考えている。

D'さんも、「何か自然な形で、おいていう感じじゃなくて、ゲイの人が出てくる感じの描き方が良かったかな」と感じていた。

一般誌で描いていることについて、C'さんは、「普通的生活マンガだから、いろんな人の生活が描かれているマンガだなあって思った。変な性的描写がないから、(『BL』だと)男の人が読んだら気持ち悪いって思う人もいるだろうし、(よしなが作品は性描写がないので、気持ち悪いって思う人は)いないんじゃないかって思った。」あるいは「普通的生活マンガっていう風に見られる点がほとんどだから。普通のストーリーマンガとして読んでた。」と語り、「BL」と異なり、「リアル系同性愛マンガ」は、一般の人も読みやすいと感じている。

D'さんは、「個人的によしながふみが好きだから、こういう風になんか一般の人も読みやすいものが出たのは勧めやすくうれしいなって思うし。」と答え、一般の人にも読みやすいと思う点は、「やっぱり性描写があるわけでもないし、キスシーンがあるわけでもないし、日常、自然な日常を描いており、ジェンダー論的にLGBTへの偏見とか差別みたいなのは減る題材だと思うから、すごい良いことだなって。」と語った。

よしながふみの作品は「BL」だと思うか、という問いに対しては、C'さんは、「ちょっと違うなって思う私はね。確かにまあ、男性同士の恋愛が描かれていれば「BL」って言っちゃえば、それまでなんだけど。」と。D'さんは、「例えば萩尾望都とかだとさっき言ったみたいに自然な別に男を好きになろうが女を好きになろうが許される世界だと思うんだけど、よしながふみはそうじゃない世界の中で、今その現代の偏見があるっていうのも踏まえた上で描いてるっていう感じはあるかなって。2人だけの世界っていう商業誌の世界とは違うかなって。偏見をもった人もでてくるし、受け入れてくれる女の人も出てくるし。」と、「BL」や「やおい」とは異なると感じていた。

以上のことから、よしながふみが描くマンガがこれまでの「BL」と大きく異なる点は、①「二者関係から三者関係へ」の転換、②ゲイの現実を描く、③社会におけるゲイの偏見や葛藤を扱うという点にあり、それらの点が読者に評価されていることがわかる。

よしながの作品や「BL」を読んだことの影響について、C'さんは、レズビアンであることをカミングアウトした友人を受け入れられたのは「BL」を読んでいたからだ話し、D'さんは現在は異性愛主義であるが、将来的にはどうなるかは分からないと話しており、自分を問い直していた。

当事者であるBさんは、「リアル系同性愛マンガ」を何作品か読んでいる。最初はゲイ雑誌に掲載されていたマンガを読んでおり、「いわゆるアダルト本として読んでいたのがあるかな。でも、ちゃんとストーリーのあるものもあって、いいなと思って読んでいたね。」と、性的な要素がある中でも、ストーリーがしっかり描かれている作品に関心を持っていた。

Bさんは、『ニューヨーク・ニューヨーク』について「98年に、こういう男同士の恋愛ものがで

たっというのは画期的なのかなって。それなりに感情移入はしたと思うんだけど……むしろ辛くなる感じ。」と述べていた。同性愛者の現実を見せつけられ、感情移入よりも辛い気持ちが前面に出てしまったようだった。しかし、同じ当事者以外の作者、よしながふみの『きのう何食べた?』に関しては「細かいところがちゃんと調べて描いてあるよね。」と述べ、「隠すのとオープンにする部分の駆け引きとか、そこで描かれている気持ちとか、『ああ、分かる分かる』っていうのが多いかな。」と、共感する部分があるという。更に具体的に『『ニューヨーク・ニューヨーク』みたいな禁断の愛で、だからこそ美しいみたいな、なんか、そういうのじゃないじゃん、これ(『きのう何食べた?』)。なんかこう、普通っていう言葉を使っちゃえばそうなんだけど。淡々としているんだけど、セクシュアリティのことも描かれていて、ちょこちょこ関わってきたり、セクシュアリティの『セ』の字もないようなところもあって、本当に日常を描いている。たまたまパートナーが男だけで。でも、特に1巻はそういう部分が多いかな。でも巻数を重ねると、『うん、そういう問題あるよっ』っていうのがちょこちょこ色濃く出てくるのかな。家族の問題とか会社の問題とか、パートナーシップの問題とか。ああ、よしながさんちゃんと調査しながら描いたんだなって。」と語り、このように、主人公カップルが同性愛者であることを自然に描写し、同性愛者が直面する問題も絡めていることを評価していた。

次にBさんは、野原くろの『ミルク』(古川書房、2005、全3巻)について、「とにかく、何だろう、凄く身近に感じたし、あったかかった。関係性が。もちろん失恋みたいなのところもあるんだけど、きゅんきゅんくるかんじ。『いいな、こんな恋愛したいな』って感じ。」と評しており、共感できること、かつ心惹かれることを語った。『ミルク』は、ゲイである主人公が居候であるノンケの友人への恋心を軸にした日常を描いている。その恋模様にはBさんは、惹かれたのである。

作者が当事者か否かによる感じ方の違いについて、Bさんに尋ねてみると、「当事者が描いた方が『ああ、分かる分かる』って多いかもしれないな。でも、よしながさんののは分からないってわけでもないな。ただ、キャラクターの画風っていうのがね。こういう2人じゃん。細身のさ。違うじゃん。だから、当事者の人にも好みがあって、こういうの(細身のキャラクター)が好きな人もいるんだけど、こういうの(体つきのいいキャラクター)が好きな人たちもいっぱいいて、そういう点では、『あ、分かってるよね』ってちゃんと疑似恋愛できるようにキャラクターがついたように描いているよねって。」と、キャラクターの描き方の違いに注目し、更に「ゲイの作家さんはね、ゲイにもいっぱい色々好みがあるんだけど、何がセクシーなのか、どういう仕草だとか、どういう言葉遣いだとか、どういう関係性がセクシーなのかっていうのが『ああ、分かってるよね』みたいな。『そう、そこだよ!』とか、絵にしても、水着に着替えるときの身体の描き方とか、脱ぎ方とか、こう、『エロス』ってのを考えているんだと思うね。こういう足の開き方とかさ。」と仕草などの細部にも、当事者ならではの魅力がちりばめられていることを述べていた。

以上の事から、当事者にとって「リアル系同性愛マンガ」は、まず同性愛を「禁断の愛」と特別視することなく、自然な「日常」を描いており、自らの居場所ができる安心感につながるとい

うことのものであった。また、当事者が作者である作品には、キャラクターの容姿や仕草に色気を感じるどころが盛り込まれるので、魅力を感じていた。他方で、当事者にとっても、当事者でない者にとっても、具体的な場面設定で、「当たり前」とされてきたことについて、呼びかけられる点が重要であるといえよう。

7. 同性愛マンガの変化と現在

本研究では、サブカルチャーの一つであるマンガ世界で「同性愛」がどのように描かれ、社会的諸主体によりどのように読まれてきたのかについて、検討した。時代背景や作者の意図、表現媒体の形式、それを取り巻く環境とともに、どのような読者がどのようにそれを読み、関わってきたのか、その一端を明らかにするために読者インタビューを実施した。インタビューは、「花の24年組」の作品を読んでいた女性1名、20代の「BL」・「やおい」の読者4名、「リアル系男性同性愛マンガ」を読んでいる同性愛者1名の6名である。限定された読者への調査であるが、その結果から、少女マンガに誕生した「少年愛」から「JUNE」を経て、「やおい」・「BL」、「リアル系男性同性愛マンガ」へと引き継がれたマンガは、次のように描かれ、読まれてきたといえる。

一つは、第1報で述べたように、「花の24年組」による「少年愛」マンガと『JUNE』に掲載されたマンガにおいて、「少年愛」は男性中心社会の抑圧とそれに起因する女性性から逃避させる「装置」であり、「少年愛」が現行のジェンダー秩序に対抗する表現であるというだけでなく、「女性性」に縛られることなく表現できる世界を生み出した。その性描写は、少女たちが立ち入ってはいけないと思いついていた性の世界への扉を開く「装置」でもあった。この「装置」は、少女たちに要求されたり、拒否されたりしながら、拡大し、ある層の少女たちの間で普通に読まれるものとして、成長していったと考えられる。

二つ目に、男性同性愛をモチーフとする作品は、さらなる自由な表現の場を求め、素人の女性の書き手による「やおい」やプロの女性作家による「BL」というジャンルを築いたが、その過程で、特別な意味づけを与えられていた男性同性愛は「性的読み物」として読者に受容されるようになっていた。読者インタビューから、女性独自のポルノグラフィが獲得されつつあるのではないだろうか。また、読者インタビューからは、読者の多様な反応や、期待が見えてくる。それは時に、ジェンダー秩序に対抗的であるだけでなく、ジェンダー秩序に親和的であったり、セクシュアル・マイノリティに差別的であったりした。また、「BL」は男性同性愛の世界だけではなく、女性には近付きがたい男性周辺を描き、女性読者の世界を広げる場にもなっていた。同人誌やネット漫画なども交え、限定的な読み手に合わせた多様な作品を生み出す場となった。男性の生活や心情をリアルに描く作者も登場し、ゲイの抱える諸問題にまじめに取り組んだ作品も登場した。「BL」の広がりによって、現実とは違う形の男性同性愛の存在がクローズアップされた。「BL」愛好家は「腐女子」と揶揄されながらも、数の多さから、社会の男性同性愛への認知は高まり、一般誌への「リアル系同性愛漫画」掲載を後押しすることになったと考えられる。

三つ目に、男性同性愛の当事者からの批判を受けて誕生した「リアル系男性同性愛マンガ」は、多様な社会的諸主体（つまり、同性愛の当事者とそうではない作者）により、また多様な読者（同性愛の当事者や理解している読者、異性愛を当然と思っている読者など）を想定し、ジェンダー秩序に対抗する表現や社会的課題への呼びかけを濃淡ありながらも盛り込み、描かれていた。

以上のことから、あるジャンルの少女マンガや「やおい」同人誌、「BL」、あるいはゲイ専門誌に描かれてきた男性同性愛をモチーフとする作品は、閉じられた空間で意味をなしてきた。それらは、互いに棲み分けることで、差別的で抑圧的な現実に対抗する「装置」や表現となり得たのである。そのことはいうまでもなく重要であったが、「少年愛」や「やおい」・「BL」がそうであったように、別の境界線による排除や偏見をつくりだしてもきた。「やおい」・「BL」の差別的表現の批判から生まれた「リアル系男性同性愛マンガ」は、書き手も、読み手の想定も多層であり、そのことにより、新しい可能性が書き手と読み手に期待されていると考えられた。

註

- 1) 榎原史保美 『やおい幻論』夏明書房, 1998, pp.42-44
- 2) 永久保陽子 「〈やおい小説〉論・序論」『専修国文』第65号, 1999年
- 3) 藤本由香里 「少年愛／やおい・BL」『ユリイカ』, 2007年12月臨時増刊号, p.44
- 4) 堀あきこ 「リアルとファンタジー, その狭間で見る夢」『ユリイカ』2012年12月号, pp.181-182
- 5) 三浦しおん×よしながふみ 「フェミニズムはやっぱ関係なくないのよ」よしながふみ『あのひととここだけのおしゃべり』白泉社, 2007, pp.59-60
- 6) こだか麻×よしながふみ 「ボーイズラブじゃないと描けないこと」よしながふみ『あのひととここだけのおしゃべり』白泉社, 2007, p.117
- 7) 同上書, pp.119-121
- 8) 東園子 「私のための物語」『ユリイカ』2012年12月臨時増刊号, p.174
- 9) 同上書, p.132
- 10) 藤本純子 「『ボーイズ・ラブ』小説の変化と現在一角川ルビー文庫〈1992～1995・2000～2003〉作品の比較分析から一」大阪大学大学院文学研究科『待兼山論叢 日本学篇』第37号, 2003, pp.19-21
- 11) 季刊レポ <http://www.repo-zine.com/archives/7889> 2016年1月17日閲覧
- 12) Dearly Beloved(用途のない備忘録) <http://blackarmor.exblog.jp/7508722/> 2016年1月18日閲覧
- 13) 羅川真里茂 『ニューヨーク・ニューヨーク』1巻 白泉社, 2003, p.361
- 14) 藤本由香里 『少女まんが魂』白泉社, 2002, p.69
- 15) 溝口彰子 『BL進化論』太田出版, 2015, p.88
- 16) 松井みどり 「よしながふみ BL 誌でのデビューから『大奥』、『きのう何食べた?』まで」『美術手帖』2014年12月号, p.37
- 17) 同上書, p.36
- 18) よしながふみ 「マンガ人生, 花開いて」『ダ・ヴィンチ』2012年11月号, pp.170-173
- 19) 『弟の夫』田亀源五郎インタビュー: ゲイアートの巨匠は“一般誌”で何を伝えるか <http://ebook.itmedia.co.jp/ebook/articles/1506/05/news013.html> 2016年1月15日閲覧

<付記> 本稿は、橋本が2～4の前半を、大岩が4の後半～6を執筆した。山田が、1と7を執筆し、全体を調整・修正し編集し直した。